



学園だより No.39

■発行人・発行所/学校法人 北海道カトリック学園 理事長 勝谷 太治
札幌市中央区北1条東6丁目10カトリック札幌司教館内

天国は完全な愛の世界です。自分自身の全てを他者のために与えつくす「完全無私」アガペーの愛と言われる世界です。地獄、その間の「煉獄」と言う概念があります。煉獄はこの世で果たし得なかった罪の償いをするところ、地獄へ落ちるほどではないけれど、天国に入るために清められなければならない人が行くところと説明されます。しかし、これらの説明に私は不満です。「行ないに対する報い」、「罪とその罰」と言う観点でしか語られないからです。

私には幽霊を見たことがありません。しかし、もしそのような霊の存在を感じるならば、その魂が私に救いを求めて現れるのでしょうか。恐れることなくその魂の為に祈れ、祈りを求める煉獄の魂だと思っています。

これを書いている11月は教会では死者の月です。あまり触れることのない死について、考えてみようと思います。死んだらどこへ行くかということになると教義的にはキリスト教と仏教では考え方を異にしていますが、一般人の心情としては似たように考えているようです。テレビや映画ではお坊さんや神父が除霊や悪魔祓いに大活躍です。とはいえ、実際のところテレビのような形で「仕事」をすることはまずありません。しかし、何度か「悪魔祓いをしてください」と頼まれ、やったことはあります。しかしそれは正式な「悪魔祓い」や「除霊」の儀式ではなく、死せる靈魂の救いのために、聖水を用いて祈るというものでした。それでも、依頼した方が経験していた不思議な現象は必ずなくなりました。

私たちはこの世にあっても愛する人たちのためにふさわしくない自分を変えようと努力をします。それにはある種の痛みが伴います。しかし、怖れや強制ではなく、愛に向かう希望が根本にあります。愛のための自己犠牲です。同様に、煉獄の魂は刑期の終わるのを待つ囚人のような存在ではありません。罪の罰や償いと言うより、罪の結果妨げられていた愛の交わりへと立ち帰るため、その妨げになる執着を脱ぎ捨てる痛みを味わうのです。だから、煉獄の魂(死者)のために私たちが祈ること(供養すること)はその魂の救いの為に大きな助けになります。なぜなら、彼らからは得ることのできないこの世との関わり、愛の交わりの世界を私たちの祈りを通して実現するからです。祈りは彼らの心が愛に開かれていく大きな助けになります。



昨年、我が家の4人目の子が4年保育で入園をして、今、年少さん。「幼稚園に行きたくない」と言ったことは一度もなく、毎日楽しんでいる様子。それは、先生たちが子どものわがままにも付き合い、出来ないことは自分で出来るようにサポートしてくれるから。いつも明るくのびのび過ごせる環境であるから。そして、その中で誰にでも優しくできる心が育ち、親も育ててもらっているなど日々感じています。

あたたかな気持ち

苫小牧聖母幼稚園 保護者 田野 珠和

これまで、長年お世話になってきた幼稚園が閉園との知らせ。すぐには気持ちを切り替えられず、先生の顔を見れば寂しさに涙が出そうになりました。園のお祈りも歌も「4つの大切な心」も、親の私も完璧に言え、歌えるほど通ってきました!子どもに教えてあげられるくらい…そんな思いが溢れてきます。

大好きな園を離れるのは、とてもとても名残惜しい。これから先、入学卒業と成長を見てもらえないのが寂しいです。毎回あたたかく迎えてくださった先生方の優しさ、パワフルさ、面白さ、幼稚園



に行く時の私のワクワク楽しい気持ち。これがあった事実は消えることはありません。幼稚園でもらったこのあたたかな気持ちを持って、次の幼稚園も楽しみたいと思います。

この幼稚園を選んで、通えて、本当に幸せでした。ありがとうございました。



ご供養して頂けますか？

学校法人 北海道カトリック学園 理事長 勝谷 太治

獄はその逆の完全なエゴイズムの世界。全く愛に閉ざされた孤独な魂の世界です。それでは「煉獄」というのはどのようなところでしょうか。それは神の愛の光とまなざしを遠くに感じながらも、自分を与えきれず、その愛の招きに完全に応えられない魂の世界です。妨げになっているのは何でしょうか。多くの執着です。この世への執着、それは人への執着であるのか、物への執着か、金への執着かもしれせん。あるいは、激しい恨み、怒り、悲しみかもしれません。

教えて! チャプレン

答えていただくのは、松村 繁彦 神父様です。クリスマスツリーはキリスト教から始まったものではありませんが、イエス・キリストの誕生を思い起こす大切な意味がこめられ、後の時代に飾られ始めました。このツリーにまつわる伝説は一説には北欧を中心に、ゲルマン民族によって広まったと言われています。他にも伝説がありますので、是非調べてみてはいかがでしょうか。さて、「永遠」の象徴である“樅の木”がゲルマン民族に広まっていた異教の祭儀で使われていました。8世紀に入りドイツでキリスト教徒がキリストの「永遠」を讃えるために異教のシンボルである“樅の木”を切ったところ、すぐそばに“モミの木”が生えてきたという奇跡物語があります。そこから、冬でもその葉の色が変わり

幼稚園で「神様のお話」をしてくださるチャプレン(神父様)に、子ども達からの質問に答えていただきます。 さゆり幼稚園 そら組の友だちからの質問 「どうしてクリスマスには、クリスマスツリーをかざるの?」

葉を落とす“樅の木”ではなく、緑の色を輝かせ葉が落ちることのない“モミの木”を始めとした常緑樹が代わりに使われるようになりました。日照時間の最も少ない、つまり暗闇の時間が最も長い冬至の時期に、「枯れずに緑を保つ」こと、すなわち闇の時間や寒い冬中でも「永遠のいのちを示す」もの「息吹を絶やさぬもの」として、私たちに示すために使われ、飾られるようになりました。クリスマスツリーには、私たちが諦めそうな時、苦しんでいる時、悲しんでいる時でも、生き生きとした生命と、闇の中での光(イエス)を示し、幸せに生きるようにとの願いが込められているのです。ですから、子供たちにはツリーを見るたびに「元気」を思い出してもらいたいアイテムなのです。

ワンポイント ●ツリーを飾り始める時期は、特に決まりはありませんが、クリスマスを準備する待降節(クリスマスから4週間前)から準備され、終わりの片付けの日は1月6日(主のご公現:三人の博士が到着した日)と決まっています。 ●ツリーの飾りには、神の愛やキリストの血をイメージする“赤”、命を示す“緑”、純潔や北欧の雪の“白”で飾られることが一般的です。電飾などはろうそくの代用、丸い飾りはアダムとイブが食べた知恵の実を示すとも言われています。その他の装飾物は商業の影響によるものや、異教の影響によるものが多いと言われています。 クリスマスツリーにはイエスの誕生を学ぶ内容がたくさん盛り込まれているのです。

トラブルや葛藤を乗り越える力

藤女子大学人間生活学部保育学科 教授 高橋 真由美

乳幼児期に身に着けることが望まれる力とは何でしょうか。「あきらめずに物事に取り組み力」、「自分の気持ちや思いを表現する力」、「相手を思いやり協働して何かを行う力」など、様々なものを挙げることはできますが、望まれる力のひとつに「トラブルや葛藤を乗り越える力」があります。

大学の授業の中で、「トラブルや葛藤を乗り越える力」はどうやって育むのか?について学生と考える機会をもった際に、以下のような事例を提示しました。「4歳児クラスのAちゃんがブランコに乗っていました。そこへ同じクラスのBちゃんが来て、私も乗りたいと言います。でもAちゃんは代わろうとしません。そのうち、Bちゃんが怒り出してしまいました。そばに居るのはあなただけです。さてどのようにかわりますか?」この問いに対する回答で多いのは、「代わってあげるように説得する」「あと10回こいだら交代などのルールを示す」というものです。どちらも間違いではありません。



間違いはありませんが、説得されれば、仕方なく代わることもあると思います。また「ルールを示す」方法は、自分の気持ちに係なく従うこととなります。何度もう言うようですがこの2つが間違っているということではありません。

し、そういった対応は保育の現場でもよく見られることです。ここで着目したのは、「トラブルや葛藤を乗り越える力」をどうやってつけるのか?ということが前提にあることです。「代わってあげるように説得する」ことは、

せん。ここに「自己決定がない(もしくは弱い)」ことを問題視しているのです。トラブルや葛藤を乗り越える力をつけるためには、その状況を自分なりに把握し、その状況下で自分がどうしたいのかを相手に伝え、伝えたことに対し相手はどう考えるのかを聞き、二者の意見や気持ちを調整し落としどころを見つけていくという過程を数多く経験することが大切だと思ふのです。

しかしながら、幼児には意見の伝え合いや調整が難しい場面が多々あります。そんな時にそばにいる大人が、意見を引き出してあげたり、色々な考え方ができることを提案してあげたりすることが大切なのではないでしょうか。そして最も重要なのは最後にどうするかを決めるのは、「子ども達」だということです。大人がよかれと思って解決に導くことが、トラブルや葛藤を乗り越える力を阻害しているかも…という意識を持ち、子ども達のトラブルや葛藤場面に寄り添う大人でいたいものです。

登別カトリック聖心幼稚園

ありがとうの言葉に支えられ

教諭 島山 順

子どもたちの心の安定はお母さんが元気である事！私たちは子育てに家事にと頑張っているお母さん達の力になれないものかいつも考えていました。我が子をしっかりと抱きしめ、身を切って守るにはたくさんの力が必要です。心と体がほっと一息つける事は出来ないだろうか。子育てをお休みする時間を作ってママの時間も大切にしたい。そうした強い思いで実現したのが園開放はっぴーランド『遊び隊』の「ママヨガと幼稚園体験」でした。講師を招き本格ヨガを体験し、その間子ども達はクラスに混ぜてもらい、幼稚園の遊びを満喫しました。お母さん達はハーブティーを飲みながら講師と談話を楽しんで貰いました。その後、参加したお母さん達からこの企画に際し感謝の声を頂いたのです。嬉しかったのは「子どもをこの園に入れて良かった」と言う最高の言葉でした。企画にあたり春から準備を進め、模索をしながら実現したものだったので、苦労もありましたがお母さん達の労いと感謝の言葉で吹き飛んでしまいました。

これからも子どもたちの活動は勿論ですが、お母さんがゆとりを持って子育てを楽しめるよう力を注いでいきたいと思ひます。



さんぽみち

カトリック聖園てんしのおうち

成長の喜びに満ちた日々

保育教諭 長谷川 礼奈

てんしのおうちは0~2歳児の22名で縦割り保育をしており、先生のお部屋から2つのクラスを見渡すことのできる小さな保育園です。保護者の方と身近に関わりながら、子どもたちの成長を見守り保護者の方の協力を得て、日々保育を行っています。

私は0歳児4名、1歳児4名の計8名と天気の良い日は戸外にたくさん行き楽しんでます。手を繋いだり散歩車に乗ったり、松ぼっくりや木の実の感触、カサカサなる落ち葉の音等、自然を体全体で感じながら散歩をしています。公園では探索を試みたりと身体を思いっきり動かしています。0・1歳児の子どもたちの成長は目覚ましく、一人で歩けるようになった、お話が上手になった等と日々喜びに満ちています。最近のブームはお友達と手を繋いでお部屋を歩くことです。手を繋いで貰えることも嬉しそうにし、お部屋の中を歩いて楽しんでます。

様々な経験を重ねる中、日々成長している子どもたち。この成長を保護者の方と共に喜びながら、寄り添い見守っていきたいと思ひます。



岩見沢天使幼稚園

MAYA MAXXさんと一緒に大きな絵を描こう!

教諭 永田 恵理

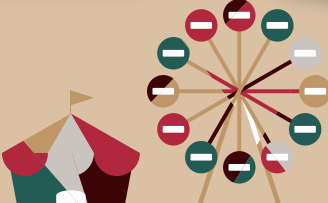
今年度自園では初めての試み、岩見沢在住の画家MAYA MAXXさんと白い大きなシートにお絵描きをするイベントを行いました。

青空の下 MAYAさんの言葉がけで、まずは絵の具を手足でシートいっぱいに広げます。絵の具が乗った色鮮やかなシートはずっしりと重みがありましたが、みんなで持ち上げ上下に「わっしょい!わっしょい!」と揺らし力を合わせて乾かしました。

次に絵筆でお絵かき。「絵は好きな色で好きなように描いて良いんだよ!」というお話しに、海にいる生き物、原っぱにいる生き物などをイメージしながら思い思いに描き上げる子ども達。いつの間にかおしりや頬や髪の毛まで絵の具だらけになりましたが、日常では体験することの出来ないダイナミックな活動を全身で楽しみました。

活動の終わりには、お湯を張ったタライにドボン。なかなか落ちない絵の具を拭いながらお友だちとお風呂のように浸かる子ども達の笑い声がいつまでも響いていました。

“楽しい!”の気持ちを共有した時間が子ども達の体と心の中に残っているように思ひます。これからも、好きなこと夢中になれることにたくさん出会えるよう、日々の保育に努めていきたいと思ひます。



大麻藤認定こども園

『かたちのないもの』を見ようとする目を育てる

保育教諭 本吉 純子

乳幼児期に必要なことは、安心して遊べる場所や成長を促す楽しい活動等様々な事がありますが、1番大事なことはやはり「平和を愛する心」、まさに宗教教育・心の教育と私は思ひます。自分を愛し、他者を思い遣り、喜んで誰かの役に立つ人が大勢いたら、どんなに温かい世界になることでしょうか。情報過多の現代、能動的に動かずとも沢山のものが目に映り、耳に入ってきます。表面で物事を判断するのではなく、その奥にあるもの、すなわち「かたちのないもの」を見ようとする目が大切であり、それを子どもに伝えていくことが私たちに与えられた使命だと思ひます。

園では年中・長に聖書のお話を伝えています。そればかりが宗教教育ではありません。日々の園生活の中で、欠席した友だちを心配する、他者と思ひを分かち合う、喧嘩をした、小さないのちを愛する・・・沢山の心揺さぶられる出来事が積み重なって心が豊かになっていくのだと思ひます。私たちもまた、子どもに寄り添っていると新たな発見や学びがあるので、保育者にも子どもにも、心の中の畑に「よい土」を準備し、種を頂いたら大きく育てられるようにしておく必要があります。子どもと共に、丁寧に心の畑づくりが出来るのがカトリック園だと思ひます。

自園を卒園する子どもたちが、世を照らす光の子として歩んでいけるよう願ひながら、これからも日々の保育に尽力致します。

